

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

誰が主人公か——『ヴェニスの商人』 雑感

狩野良規*

『ヴェニスの商人』の定番の論題である——誰が主人公か？

日ごろ、シェイクスピアなどほとんど読んだことも舞台を見たこともない学生たちと^{シェイクスピア}沙翁の芝居を語り合っているが、それはこちらにも教えられることの多い貴重な体験である。彼ら彼女らには古典劇に対する先入観がない。僕も「解説など読まずに、とにかく真っ白な気持ちでテキストを読んできな」と。で、そうした白紙の頭と心から出てくる感想は、僕自身の偏見をあぶり出してくれる。僕がいつの間にか当然の前提だと考えていたことが、いかに根拠のない思い込みであったか。

と同時に、学生たちのさまざまな偏見にも気づかされる。演劇や映画の鑑賞でいえば、どれほどハリウッド作品の影響が強いのか。総じてハリウッド映画には、格好のいい、スッと共感できる主要人物がいて、その好感度高き人物と心を一にして物語の世界を旅すれば、2時間ゆったりと楽しめる。そう、アメリカ映画が見やすいのは、ストーリーが単純だからではなく、観客が魂を預けられるヒーロー、ヒロインが存在するからである。

また、善玉と悪玉がすぐにわかるのも、見やすい理由。アクションものでいえば、正義の味方が邪悪な敵をやっつける。かつての西部劇では白人が野蛮なインディアンを退治した。戦後は連合軍がヒトラーと死闘を繰り広げて、ヨーロッパに平和をもたらした。だが、1960年代の公民権運動以来、インディアン

* 青山学院大学国際政経学部教授

ネイティブ・アメリカン
は先住民族となって悪役まかりならずとされ、同じころヴェトナム戦争で世界中から「ヤンキー・ゴー・ホーム」と罵声を浴びせられたアメリカは、ナチスでさえ絶対悪としては描けなくなる。米ソ冷戦時代はソ連ないしは共産党もずいぶん悪玉に駆り出されたが、それもベルリンの壁が崩れてからは……

敵にして文句が出ないのは、そう、宇宙人だ。『スター・ウォーズ』を何作も安心して作れるのには、訳がある。SFXやCGを駆使した映画制作にもドンピシャだし。

と、まずはシェイクスピア劇がハリウッド映画とはだいぶ違う、自動的に感情移入できる主人公は存在せず、勧善懲悪の芝居でもないと、学生たちとの対話はそこいらへんからスタートすることが多い。

タイトル・ロール (title role) ということばがある。主人公の名が作品のタイトルになる。それが普通のようにも思えるのだが、さて、シェイクスピア劇の場合は……

沙翁の歴史劇、このジャンルは簡単で、イングランド中世の国王の名前が作品名になっている。『ジョン王』、『リチャード二世』、『ヘンリー四世』など。もっとも、なよなよとした軟弱な王様、またリチャード三世のような残酷な独裁者もいて、必ずしも国王を主人公と呼んでよいかどうか。シェイクスピアの処女作と推測される『ヘンリー六世』三部作はその典型で、統治能力なき為政者の治世に群雄が割拠する様を描く。各幕ごとに主人公が^{ヒーロー}変わる。プロ野球の試合後のお立ち台のような、“日替わりヒーロー”状態。

悲劇もだいたいタイトル・ロールが主人公といえるだろう。しかし、優柔不断なハムレット、部下に軽々と^{だま}騙されるオセロー、横暴で娘たちの気質も見抜けないリア王、王位を篡奪してから悩むマクベスと、ハリウッド映画と同じくらい突出したヒーローなんだけど、必ずしも格好よくはない。問題を抱えて苦悩する人たちばかり。だから、勧善懲悪劇ではない。また、作品のタイトルを担ったジュリアス・シーザーは、劇の途中で死んでしまう。19世紀の批評家エドワード・ダウデンは、この劇の主人公は生身のシーザーではなく、“シーザー

の精神”である、と。なるほど文学として読むだけなら賢い答えなのだが、さて芝居を上演するとなると、劇団の看板俳優をどの役に配するか。シーザーではなさそう、アントニーかブルータスカ¹⁾。

そして喜劇は、『間違いの喜劇』、『から騒ぎ』、『お気に召すまま』、『終わりよければすべてよし』、『冬物語』などと、実にいいかげんな、熟慮の跡がうかがえないタイトルが多い。喜劇は人間関係性の芝居、すなわち群像劇だから、ひとりでタイトルを背負える人物はいないってわけか。でも、そうなると『ヴェニスの商人』の場合は——具体的な名前だ、ちょっと気になる。

名優はどの役を演じたがるか。『ヴェニスの商人』なら、もちろんシャイロックだろう。もっとも、彼はユダヤ人の高利貸しだから、商人ではない。この作品は1590年代ロンドンの反ユダヤ人感情の高まりの中で書かれたといわれている²⁾。シェイクスピアもヴェニスに舞台を移して、キリスト教徒の商人たちが業突張りのユダヤ人を懲らしめる喜劇を書こうとしたようだ。けれども、沙翁はシャイロックを書いているうちに面白くなってしまったらしく、他の人物たちとのバランスを無視して、おどけ者の脇役を大きく膨らませた。それは、フォールスタッフやリア王の道化をはじめ、シェイクスピアのよくしたところである。

シェイクスピアが筆をすべらせた結果、『ヴェニスの商人』は後世、悲劇的なユダヤ人の劇に変容していく。19世紀になると、名優エドモンド・キーンとヘンリー・アーヴィングが、喜劇的な悪役の枠を越えるシャイロックを演じてみせた。そして何より決定的だったのは、言わずと知れたナチスによるホロコー

1) 拙著『シェイクスピア・オン・スクリーン』、三修社、1996年、第5章第2節「スターのシェイクスピア映画——チャールトン・ヘストンの『ジュリアス・シーザー』」をご一読のほど。

2) ユダヤ人でエリザベス女王の侍医だったロデリーゴ・ロペスが1594年、女王を暗殺しようとした罪で逮捕され、真相は謎のまま、処刑されている。また、沙翁は彼の先輩格クリストファー・マーロウの『マルタ島のユダヤ人』（1589年初演）の主人公、ユダヤ人のバラバスと明らかに張り合って、シャイロックを造形している。

ストである³⁾。もうユダヤ人の金貸しを道化者にはできない！

ちなみに、ウンベルト・エーコとジャン・クロード・カリエール⁴⁾が対談をして、興味深い話をしている。曰く、我々はシェイクスピアの劇を彼が書いたとおりに読まない、だからこそ書かれた当時のシェイクスピアよりずっと豊かなんだ。書物にはそれぞれの時代が加えた解釈がこびりつく、傑作は自らが発見した解釈を吸収することによって、より个性的になっていくのだ。本は読まれるたびに変容し、後世の読みが作品に影響を及ぼす。セルバンテスはカフカに影響を与えたが、カフカもセルバンテスに影響を与えた。なぜならセルバンテスを読む前にカフカを読めば、読者は知らず知らずのうちに『ドン・キホーテ』の読み方が変わるはずだからだ、と⁵⁾。

今日のシャイロックは、ホロコーストと、それを思いながら読まざるを得ない現代人の解釈を吸収して、沙翁の筆になるユダヤ人より一層奥行き深い登場人物に変容しているわけである。

看板の男優がシャイロックを演じたいとすれば、女優はポーシャであろう。4幕1場の法廷シーン。法学博士に変装したポーシャは、まずシャイロックに慈悲の大切さを説く。友人の借金の肩代わりをし、しかし自身の船が帰港せず返

3) 僕の好きな映画の場面をひとつ。ロマン・ポランスキー監督の映画『戦場のピアニスト』(2002年、ポーランド・フランス合作映画)で、強制収容所へ送られるユダヤ人たちが集められた鉄道線路脇の広場、ぎゅうぎゅう詰めで修羅場と化した人ごみの中で、主人公のピアニストの弟が『ヴェニス商人』を読んでいる。シャイロックのセリフを音読する弟に、ピアニストは「奥が深いな」。また、彼の父親に扮していたのはフランク・フィンレー。ローレンス・オリヴィエ主演の『オセロー』(1965年、イギリス映画)で、地味だがリアルなイアーゴを演じて、オリヴィエの歌舞伎のごとき大振りの演技を引き立たせていた。『戦場のピアニスト』でも、目立つことなく、しかし的確に死出の旅へ向かうユダヤ人を好演していた。

4) ウンベルト・エーコは紹介不要であろう高名な言語学者。ジャン・クロード・カリエールは、これも有名なフランスの作家、脚本家、俳優。難解な映画の脚本を多数手がけている。

5) ウンベルト・エーコ、ジャン・クロード・カリエール『もうすぐ絶滅するという紙の書物について』王藤妙子訳、阪急コミュニケーションズ、2010年(原著2009年)、pp. 222-225。古書をこよなく愛する巨匠二人が、デジタルの時代に紙の書物がいかに優れているかを語って、痛快きわまりない本。僕のようなIT大嫌いな人間は、この書物を読む方が、薬を飲むよりずっと確実に血圧が下がる。

済期限に間に合わなかったアントーニオに、情けをかけてやってはどうか。

「慈悲は強制されるものではない、天から地に降りそそぐ恵みの雨のごときものだ」、慈悲は王権による支配以上のもの、王の心中に王座を占める、それは神ご自身の性質のあらわれだ。よって地上の権力は、慈悲が正義をやわらげる時、神の力に似たものとなる」、だからシャイロックよ、正義ばかりを求めず、慈悲をかけてやれ、と。

いいセリフじゃないか。感動的ともいえる名スピーチである。シェイクスピアは、世の中、正しきことだけで動くものではないことを熟知している。

けれども、シャイロックは応じない。契約をたがえた時の利子代わり、何かなんでもアントーニオの心臓近くの肉1ポンドを要求する。すると正義の味方もとい正義より慈悲を説くポーシャは、論法を一変させ、ならば彼の肉を切り取れ、しかしその際に一滴でも血を流せば、ヴェニスの国法によって罰せられるぞ、と⁶⁾。

そこからシャイロックへのすさまじいバッシングが始まる。「目には目を」、いや「理屈には理屈を」と言った方がよいだろうか。裁判が終わるころには、寄ってたかって、もうユダヤ人をボコボコ。出来の悪い勸善懲惡劇と同じ臭いがしてくる。財産はすべて没収、おまけにキリスト教徒に改宗せよ、と。

残酷ではないか。信仰は西洋人がアイデンティティを形成するひとつの大きな拠りどころ。なのに、ユダヤ人たることをやめろ！と、それはもう、法廷に集まったキリスト教徒たちによる集団リンチにほかならない。敵役が懲らしめられるのを笑っていた観客は、しだいにシェイクスピアが返す刃で自分たちキリスト教徒の不寛容と偽善性を暴いていることに気づくだろう。

そう、それくらいのことにはやる男だ、シェイクスピアは。彼は人の心を見透

6) ヴェニスのキリスト教徒たちは自分たちの共同体の内部では、友情や慈悲を重んじながら生きているが、それが通じない異教徒のシャイロックには、法的ないしは契約の概念によって対抗したわけである。シャイロックがヴェニスにおいて“内なる異邦人”である点を僕は、岩井克人「ヴェニスの商人の資本論」(岩井克人『ヴェニスの商人の資本論』筑摩書房、1985年、pp. 4-63)によって痛感させられた。この岩井論文は、経済学者による第一級のシェイクスピア論である。

かす作家、自分の芝居に登場させる人物たちのように純情で善良で、しかしだからこそ己の独善性を認識していない人間とは違う。うん、やはり勧善懲悪劇ではない。

というわけで、我々はだんだんとシャイロックに同情するようになり、それにつれてポーシャはこまっちゃくれた策略家の小娘に見えてくる⁷⁾。おっと、ポーシャはむろん商人にあらず、さらにヴェニスではなくベルモントの人間。よって、主人公にはなり得ない。

また、彼女に惚れ込んだバッサーニオも主役を張れる押し出しも性格の深みもなし。

結局、タイトル・ロールにこだわれれば、海外に何艘もの商船を走らせるアントーニオが、ヴェニスの商人その人と考えざるを得ない。バッサーニオからポーシャと結婚するための軍資金を頼まれ、手持ちの金がないためにシャイロックに借金をして、災難を呼び込む大商人。たしかにこの芝居、アントーニオの「俺は憂鬱だ〜」との宣言から始まり、ラストは彼ひとり連れ合いをたずさえずに舞台を去る。『お気に召すまま』のジェークイズと同じ孤高の人⁸⁾。なんとなく気になる人物ではある。

だけどなあ、視点人物でもなく、狂言回しでもない。主役どころかなんらかの劇的機能を有する脇役とも思えず。この喜劇の主人公はいずこに⁹⁾。

7) 人肉裁判の場面を荒唐無稽なおとぎ話と思うなかれ。教員の会議では日常茶飯事の風景である。“口先労働者”の集まり、屁理屈合戦にこと欠かない。正義漢面した一言居士の戯言を聞くにつけ、ポーシャの底意地の悪さを思わずにはいられない。

8) イギリス人は全会一致を善しとしないところがある。10人が10人とも同じ意見するのはおかしいだろう、と。そこで舞台でも一件落着の場面で、誰かひとりだけ納得がいかずに退場していく、なんて光景にしばしば出くわす。

9) 『ヴェニスの商人』は、危ない劇である。つまりは、論じるのが危ない芝居。あまりにもおとぎ話、そして謎が多すぎる。何か裏がありそう。そもそもシェイクスピア劇にはわからないところがたくさんあるのだが、とくに『ヴェニスの商人』は油断がならない。そんな沙翁文学の謎に挑戦した労作に、田中重弘『シェイクスピアは推理作家』（文藝春秋、1982年）がある。曰く、ヴェニスにはすでに海上保険があったはずなのになぜ、3は縁起の悪い数字、ゴポーは幸運の運び屋、シャイロックは銀貨シリングからきた名で“銀貨太郎”、ポーシャは“持参金”と聞こえたはず、などなど。同じ著者の他書に、『ハムレット』の謎』（講談社、1981年）、『シェイ

で、お話は、喜劇とは何ぞや、という点に行き着く。シェイクスピアの喜劇、これがまた至極適当で、「ハッピーエンドの作品は全部コメディ」としかいいようがない。いや、西洋演劇における喜劇の概念も沙翁劇ほどではないにしろ、けっこういいかげんで、「これで決まり」という定義があるわけではない。

他方の悲劇、そちらはたいてい古代ギリシャの哲人アリストテレス、彼のカタルシスの概念を用いて説明される。そう、カタルシス。排便、排泄、もっとシャレたことばを使えば、浄化。なぜ人々が、楽しくも喜ばしくもない暗い悲劇を鑑賞するのか。それは我々が主人公に共感し、感情移入して、主人公と同じ視点で悲劇的な物語の世界を旅すれば、日ごろから心の奥底に沈殿している鬱々たる気持ち、体内の毒素を浄化できるからだ、と。

ハリウッドのアクション映画の多くは、これを通俗化したものともいえようか。

そして、喜劇はそれ以外の全部を十把一からげで……おっと、その前に歴史劇。シェイクスピアの場合は、彼が死して7年後に出版された最初の全集「第一フォリオ版 (First Folio)」のジャンル分けが慣例化している。すなわち、「歴史劇」、「悲劇」、そして「喜劇」と。歴史劇全10篇は、前述したように、イングランド中世の王様の名が冠されている。これは芸術的な性質を云々する分類ではなく、題材を念頭に置いたジャンルの設定といえようか。沙翁は作家として駆け出しのころ、自国の歴史を問うことからその創作を開始した。

クスピアは欺しの天才』（文藝春秋、1985年）もある。

また、江川卓『謎とき『罪と罰』』（新潮選書、1986年）、『謎とき『カラマーゾフの兄弟』』（新潮選書、1991年）、『謎とき『白痴』』（新潮選書、1994年）、沙翁に戻れば河合祥一郎『謎解き『ハムレット』』（三陸書房、2000年）、『謎ときシェイクスピア』（新潮選書、2008年）、さらには石原千秋『謎とき 村上春樹』（光文社新書、2007年）なんてのもある。

これらの謎解き本、真正面から素直に作品を鑑賞しようという文学ファンからはブーイングを浴びることもあるが、いや、どうしてどうして、誰かがやらなければいけない文学研究の一分野だと考えている。僕自身は謎解きの才能なく、そうした迷宮には足を踏み入れずにきたが、研究された方々の著書は感謝しながら繰り返し読ませていただいている。

各王の治世を材料にして戯曲を執筆しているうちに、シェイクスピアは国王の内心をつくづくとおもんばかるようになる。そこから苦悩する王侯貴族たちを主人公とする悲劇が誕生する。

だが、シェイクスピア劇全 37 篇の中で最も数が多いのは、17 篇の喜劇。詩人は何を思いながらコメディを書いたのか。こうは考えられないか。彼の初期のイングランド史劇は、支配階級の権力闘争、彼らの群雄割拠、栄枯盛衰の様相を描いている。それを起点にして王の内面にフォーカスするようになったのが悲劇、そして民衆を含めたさまざまな階級の人々の関係性に興味が向かったのが喜劇と。

だから、喜劇はひとりの人間の内面を^{そんたく}忖度する芝居にあらず。主人公をひとりに定める必要もなし。また、ただ笑わせれば喜劇というのは、もちろん単純にすぎる。喜劇も歴史劇や悲劇と同様、社会やそこに生きる人間を問うている。

僕の気に入っている喜劇の発想は、バルザックの「人間喜劇 (La Comédie humaine)」である。バルザックは 19 世紀フランスの民衆の置かれた悲惨な状況と彼らの残酷な運命を飽くことなく描きながら、それも距離を置いて神の目で見れば、滑稽にしか過ぎないと。命名はダンテの『神曲 (La Divina Commedia)』から。そう、あれもコメディ！だが、ルネサンスの巨匠の長篇叙事詩を「喜劇」とは訳しづらいので、森鷗外は『神曲』と訳した。

つまりは、喜劇——少なくともシェイクスピアの喜劇——は、そんなにリラックスして読むべき、また舞台を見るべき代物ではないのである。笑いが入ると、すぐに軽く受け止めてしまうのが、日本人の悪い癖。喜劇の方が実は悲劇よりよほど深刻な社会と人間の実態を暴いていることはままたまある。

しかも、感情移入できる主人公、物語を旅する際の羅針盤となる人物が不在。誰かに魂を預けずに、作品をすべて自分で吟味しなければならない。それって、ハリウッド映画に慣れきっている人には、存外難しい技なのである。

現実でも人々は、自分の意志を一任できる、自分の思考を停止できるヒーローやリーダーやらを、意識的にも無意識的にも求めている。民主主義は本来、強すぎる指導者を、独裁を許さぬための次善の策のはずだが、日常を生きるの

に忙しい我々にはなかなか面倒臭い制度でもある¹⁰⁾。そのため、“お任せ民主主義”が跋扈する今日このごろ。ヒーローのいない喜劇の世界も、自分の頭を使わなければならないゆえに、決して見やすいジャンルの芝居ではないのである。

で、えっ、『ヴェニス商人』の主人公は誰かって。僕の答えは平凡。シェイクスピアが誰を中心人物と特定させないようにあえて“外した”タイトル。または、繁栄せる貿易立国ヴェニスの商人社会を象徴する表題、そして作品はそこで右往左往する人々の群像劇。いずれにしても、主人公が誰かなんてどうでもいい、それより自分の目で一長一短ある、等身大の、普通の人間たちの悪戦苦闘ぶりを見極めるのが、喜劇のオーソドックスな楽しみ方なのではないだろうか。

(2016年7月 脱稿)

10) 民主主義だの自治だのは、とっても面倒臭い。4年後にマンションの理事の当番が回ってくる。今から頭が痛い。